



柏戸の真実

姉喜久子が生きていたら(下)

娘の面影追う両親
大相撲入門後、出世が早かった柏戸。昭和30年代半ば、山添の実家ではテレビがいち早く導入された。「年間三賞」というスポーツ紙の副賞が贈られたものが回ってきた。今はパナソニックに合併された三洋電機製だった。

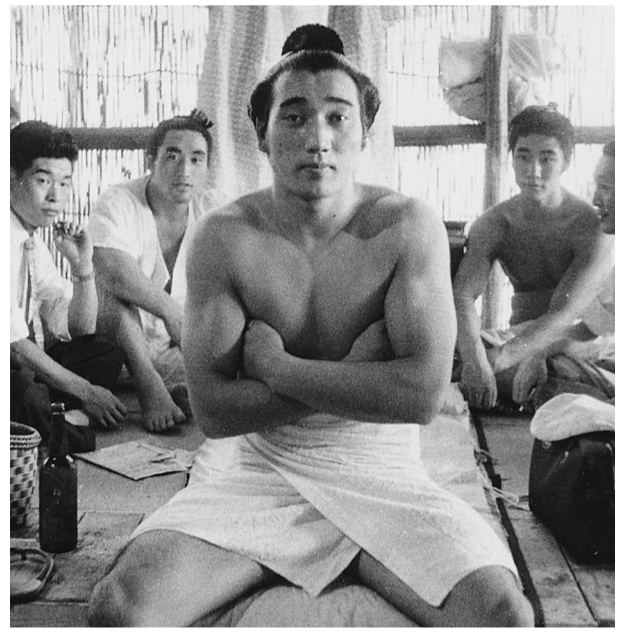
NHKだけでなく民放も大相撲をテレビで生中継していた時代。近所の人も柏戸の取組を気にして集まる。次男・剛の出世を喜ぶ一



姉・喜久子

で剛にとって兄嫁・富美(83)は「喜久子さんのことがあって、嫁は大事にしなければならぬ」と私は大切にされた。舅も姑もほどつらい思いをしたみたいだ」と振り返る。

戸籍は未婚のまま
当時、農家の嫁は労働力



当時、農家の嫁は労働力

で剛にとっても子どもを産んで一人前の解釈があった。それを目指し、自ら体を無理強いさせ、病魔に倒れ、戻ってきた喜久子は戸籍は未婚のまま今は実家の墓に眠る。

勝は鶴岡駅まで送っただけ、姉が骨になって戻ってきたことに衝撃を受けたが、

両親は幼いきょうだいたちには次女の急死を語りたがらなかった。

一方、農家の次男以下も、成人後は婿入りか、自立して生きていく時代だった。村相撲が盛んだった庄内で、剛は兄に連れられて、御幣のついた梵天を奪い合う奉納相撲によく参加した。長身を利した剛は強かった。ただ小学5、6年生で他地区の相撲大会に参加した時「おめえ、中学生だろう。小学生って言うっちゃ駄目だ」とクレームをつづられた際、即座に言い返せないおとなしきがあった。

姉は止めたはず
勝は「姉が生きていたら姉弟だけあって柏戸は姉に雰囲気似ていた(19歳の十両時代)

大相撲なんて駄目だ。向いていない」って反対した」と言い切り、姉を慕っていた剛も言うことを聞いたはずという。角界入りは剛自身が望んだ道ではなく、スカウトされたもの。まげをつけて土俵に立つ大相撲は家族にとって、派手過ぎて縁遠い世界でもあった。特に母・かつ多は大反対した。喜久子はカメラを借りてきては撮るのも撮られるのも好きだった。勝が子どもだった時分「オレがいいカメラを見つけた」と言い出し、喜久子にお金をねだった。だが届いたのはなんと日光写真機。雑誌に載った写真にだまされたようだ。「何やってんの」と叱られた時の声を思い出すが、口調は優しくかった。日光写真機は家の中でどこかに行ってしまった。

墓前で冥福を祈る
本式のカメラが手に入っていたら、そして自らの命が続いていたら剛をどう撮っていたかなど、家族は2人のやりとりを想像する。

柏戸は巡業など帰郷のたびに実家の菩提寺を訪れ、先祖代々の墓の前で手を合わせ、姉の冥福を祈った。

敬称略(富樫 嘉美)

◆柏戸 剛(かしわど・つよし) 1938(昭和13)年11月29日、旧櫛引町桂荒保生まれ。本名富樫剛。昭和29年秋場所、16歳で伊勢ノ海部屋入門。37年秋場所後、横綱昇進。44年名古屋で引退し年寄「鏡山」を継承。平成8年12月8日、58歳で亡くなった。

毎週火曜日付に掲載